

第九回 三分を定めて隆中に策を決す

—— 三顧の礼 (二) ——

(解説)

一回目の訪問は諸葛亮が留守のため会うことはできませんでした。『三国志演義』は、二回目の訪問を、新野しんやに帰り着いて数日後、しかも冬のまっさかりの嚴寒げんかんの季節とします。

前回の訪問時は、「なんともすがすがしい風景で」「山は高くはないがすっきりと美しく、川の流れは深くはないが清らかに澄み」「猿と鶴が仲良く暮らし、松の緑と竹の緑が入り交じっている」と隆中りゅうちゆうののどかな情景を描きますが、数日で激変して北風と吹雪の中、二回目の訪問を決行します。

(本文抄)

数日後、劉備は人をやって諸葛亮の消息しやうせきを探らせた。

「臥龍先生がりりゆうはもうお帰りになつています」と報告があつたので、馬に乗つてふたたび諸葛亮のもとへ出かけた。関羽・張飛もまた馬に乗つてお供をした。

時に冬のまっさかり、厳寒の季節で、雪雲がびっしり空をおおっている。数里も行かないうちに、肌をさす北風が吹きはじめ、はげしい吹雪となった。たちまち山は玉の群がるようになり、林は白銀の化粧を施したようになった。

張飛は言った。

「戦もできないようなこんな寒さのなかを、どうしてはるばる役にも立たない奴に会いに行くのか。新野に帰って雪がやむのを待ったほうがいい」

「孔明どのに私の誠意を知ってもらいたいのだ。おまえたち、寒いのがいやなら、先に帰ってよいぞ」と劉備。

「寒さぐらい平気だ。ただ、兄貴がくだらぬことで無駄骨を折るのを見ていられないだけだと張飛。

「それなら、くだくだ言わず、黙ってついて来い」と劉備。

諸葛亮の草葺きの家に近づいた時、ふと路傍の酒屋のなかから、誰やら歌う声が聞こえて来た。

劉備は「臥龍先生がおられるのではないか」と言うと、馬を下りて店へ入って行った。見れば、二人の人が机によりかかって酒を飲んでた。劉備は会釈してたずねた。

「お二方のどちらが臥龍先生でしょうか」

「貴公はどなたですか。どうして臥龍をお訪ねになるのですか」と長いひげの方。

「私は劉備です。臥龍先生をお訪ねし、濟世安民せいせいあんみん（世を救い民衆を安らかにする）の方法をうかがいたいと思っております」と劉備。

「われらは臥龍ではありませんが、二人とも彼の友人です。私は潁川出身えいせんの石広元せきこうげん、こちらは汝南出身じよなんの孟公威もうこういです」と長いひげの方。

「お二方のご高名こうめいはよくお聞きしています。ぜひ臥龍先生のお宅にご一緒をねがい、お話をうかがいたいと存じます」と劉備は大喜びして言った。

「私どもは二人とも山野で遊び暮らしている人間で、国を治め民を安んじる政治のことには関心がありません。どうか、臥龍をお訪ねになるのがよろしいでしょう」と石広元は言った。

そこで劉備は二人に別れを告げ、また馬に乗って臥龍岡がりようこうへと向かった。

家の前で馬を下り、召使いの少年にたずねた。

「先生は今日はご在宅かな」

「いま座敷で本を読んでおられます」と少年。

劉備は大いに喜び、少年のあとについて中へ入った。草堂のなかで若者が一人、炉ろにあたり

ながら膝ひざを抱えて歌っている。

劉備は、歌が終わるのをまって、お辞儀をして言った。

「私がかねてより先生を敬愛しておりましたが、お目にかかる機会がありませんでした。先日お訪ねさせていただきましたが、お会いできず、空しく帰りました。本日、風雪ふうせつについてお訪ねしたところ、お目にかかることができまして、まことに幸いです」

その若者は慌あわてて礼を返しながら言った。

「將軍は劉豫州りゅうよしゅうのではありませんか。兄をお訪ねになられたのではありませんか」

劉備はおどろいて、「すると、あなたは臥龍先生ではないのですか」

「私は臥龍の弟の諸葛均しよかつきんです。私どもは三人兄弟で、長兄の諸葛瑾しよかつきんはいま、江東の孫仲謀そんちゆうぼう（孫権そんけんの字あざな）どののもとで幕僚ばくりようをしており、孔明は次兄じけいでございます」と諸葛均。

「臥龍先生はご在宅でしょうか」と劉備。

「昨日、崔州平どのに誘われて遊びに出かけました」と諸葛均。

「どちらへ行かれたのでしょうか」と劉備。

「小舟を浮かべて江湖こうこに遊ぶこともあれば、山中そんちゆうぼうに僧侶そうりよや道士どうしを訪ねることもあります。また村里に友人を訪ねることもあれば、洞穴ほらあなで琴を弾いたり碁ごを打ったりすることもあります。ど

こといつて行く先は定まりません」と諸葛均。

劉備が「ご縁のないものはしかたありません、二度も賢人に会いそこなうとは」と言うと、「しばらくお待ちください。お茶をお持ちします」と諸葛均は言った。

すると、張飛は言った。

「その先生がいないなら、帰ろうではないか」

劉備は、「ここまで来たからには、一言も話さず帰るわけにはいかないだ」と言うと、張飛が、「風や雪がはげしいから、早く帰ったほうがいい」と言うので、劉備が叱りつけたところ、諸葛均は言った。

「兄が不在ですので、これ以上お引き留めはしません。いずれ日を改めて、こちらから返礼にうかがいます」

「先生にお越しいただくなど、滅相めっそうもありません。数日後、私の方がもう一度うかがいます。その前に、紙と筆を拝借はいしやくして手紙を書き、私の志を申し上げておきたいのです」と劉備は言った。

(解説)

二回目は、真冬の風雪をおかし、文句をいう張飛を叱りとばしながら諸葛亮を訪ねますが、またしても諸葛亮は不在でした。劉備は、置手紙を書いて帰っていきます。

『三国志』では「三顧の礼」について、二か所に簡潔に記すだけです。

一つは「諸葛亮伝」に、「先主遂に（諸葛）亮に詣り、凡そ三たび往きて、乃ち見ゆ（そこで先主はおよそ三度訪問して会うことができた）」もう一つは、「出師の表」の中で「先帝、臣が卑鄙なるを以てせず、猥に自ら枉屈して、三たび臣を草廬の中に顧みる」と。

この二つの記述から『三国志演義』は、「三顧の礼」の一大絵巻物を作り上げます。

ここで、「三顧の礼」に登場する脇役たちについて、史実でみておきましょう。

司馬徽

字は徳操、また号は水鏡なので水鏡先生とよばれています。豫州潁川郡の出身で、曹操の軍師荀彧や郭嘉と同郷です。劉備より十歳若く、劉備と会った時は三十四歳になります。史実では、劉備に聞かれて「臥龍・鳳雛は諸葛亮と龐統のことだ」と、『三国志演義』とは違ってすんなりと教えています。

崔州平 さいしゅうへい

父は崔烈といい、後漢の靈帝の時の大尉。混乱する長安を逃れて荊州に移り、司馬徽の門下生になって徐庶や諸葛亮と親交を結びます。のちに諸葛亮が蜀の丞相に就任したとき、「私は昔、崔州平と付き合ってたびたび欠点を指摘され、のちには徐庶からもいろいろと教えられた。（中略）この四人とはずっと気があった。これというのも彼らが言うべき事を躊躇せず言ってくれたからだ」と述べています。崔州平はいうべきことを遠慮なく指摘する人で、諸葛亮もそれを受け入れて心を許し合う間柄でした。相手に応じて柔らかくいうのでは、深く心に刻まれないでしょう。

黄承彦 こうしょうげん

黄承彦は諸葛亮の岳父です。諸葛亮に「私の娘は顔は醜いが、才知は君にお似合いだ」と持ちかけ、諸葛亮も承知したので娘を車に乗せて送り届けました。郷里では諺を作って「孔明の嫁選びを真似るなかれ、黄承彦の醜い娘をもらう羽目になるぞ」と言ったそうです。

黄承彦の妻は荊州の有力豪族蔡諷（蔡瑁の父）の長女で、蔡諷の次女は劉表の後妻の蔡夫人です。ですから諸葛亮は、劉備を殺そうとした蔡瑁と義理の叔父と甥となり、劉表の子の劉琦・

劉琮りゅうそうとは義理の従兄弟いとこ同士になります。このように、諸葛亮は隆中りゅうちゅうに隱遁いんとんしてはいますが、荊州支配層の閥閥けいぼつに連なる人でした。

### 石広元

石韜せきとうが名前で、字は広元あざな（一般に石広元の呼び名が有名です）。中原が乱れると、同郷の徐庶と荊州に逃れます。同じく戦乱を避けて荊州に来た諸葛亮、孟建、崔州平らと交友を深めました。後、魏に仕官し、官職は郡守、典農校尉てんのうこういに至ります。

諸葛亮が北伐したとき、敵国の魏にいる徐庶と石韜の官位を知り、「魏には多くの士がいるのだろうか、どうして二人が用いられていないのだろうか」と嘆いたといえます。

『三国志演義』では、孟公威（孟建）と酒を飲んでいて、諸葛亮を訪れようとしていた劉備と出会っています。

### 孟公威

諸葛亮・石韜・徐庶・崔州平らと交友を深めた。後に孟公威が郷里に帰ろうとすると、諸葛亮は「中国には士大夫しだいふがたくさんいる。遊樂ゆうらくはなにも故郷にあるとは限るまい」と引止めたが、

彼の言葉を受け入れず北方に帰った。魏に仕えて涼州刺史となり、名声を得ている。諸葛亮が北伐で祁山きざんに進出したとき、司馬懿の使者杜襲としゅうに「公威（孟建）によるしく」と伝えてもらっている。官位は征東將軍せいとうにまで昇進した。

いずれも、北方の戦乱を避けて荊州に移り住んだ知識人です。そして互いに学問上の師弟や学友です。黄承彦は地元荊州の有力者ですが、諸葛亮は黄承彦を通して、これも同じ荊州の有力者蔡氏一族や荊州の長官劉表とも閥閥関係にありました。ですから、諸葛亮は隠遁してはいませんが、荊州ではかなり影響力をもっていたと思われれます。また荊州の支配者の劉表に出仕しなかったのも、何か事情があったのでしょうか。

『三国志演義』は二回目の訪問時に石広元と孟公威を登場させ、史実ではありませんが、彼らに、「歌を歌って手をたたき、田舎の店で酒を飲む、千古不朽の名声など必要ない」と言わせて、政治には無関心な隱者いんしやの姿を描きます。

ともあれ二回目の訪問も、弟の諸葛均には出会いましたが、本人の諸葛亮は不在でした。劉備は、自分の願いは国家と民衆を救済することであり、そのための方策をお教えいただきたい、との手紙を書き残し帰っていきます。

当時、劉備は曹操との最前線である新野城を守っていました。その状況で、劉備・関羽・張飛の主将三人が三度も揃って居城を空けるといふのは、そう簡単にできることはありません。劉備にとつては相当覚悟がある行動だったはずで、三度行つたのは実際には劉備だけだったかもしれませんが、それでもそこに、劉備の決意の深さがうかがわれます。そしてその決意の深さが、諸葛亮という君臣の関係を越えた生涯の知己との邂逅かいこうを生むことになります。

(本文抄)

さて、劉備は諸葛亮を二度訪ねて会えなかつたので、もう一度訪問しようとした。と、関羽が言った。

「兄上には二度も自分の方から会いに行かれたが、それは礼を尽くしすぎです。思うに、諸葛亮は名は高いが、実際には無学なので、わざと会おうとしないのでしょうか。兄上はどうしてそんな人物に執着されるのか」。

「そうではない。昔、斉の桓公とうかくは東郭の野人やじん(無名の小人物)に会うために五度も出かけたではないか」と劉備。

「それはそれこれはこれだ。あいつが来なければ、わしが麻縄あさなわでしよつびいて来てやる」と張

飛。

「おまえは無礼にもほどがあるぞ。おまえはついて来るな。私は雲長うんちやう（関羽）と二人で行く」と劉備は張飛を叱りつけた。

「兄貴ら二人とも行くのに、どうして置いてきぼりにするのか」と張飛。

「ついて来るなら、無礼があつてはならんぞ」と劉備が言うと、張飛は承知した。

そこで三人は馬に乗り隆中に向かったが、諸葛亮の草廬そうろへあと半里の手前で、劉備が馬を下りて歩いて行くと、諸葛均に出会った。

劉備は慌てて挨拶をしながら言った。

「ご令兄れいけいはご在宅でしょうか」。

諸葛均は「昨夜、帰宅しました。今日はお会いになれるでしょう」と言うと、飄然ひようぜんと立ち去った。

劉備が「今度は先生に会えるぞ」と言うと、「何というやつだ。わしらを家まで案内していいものを、勝手に行ってしまいやがって」と張飛。

「人それぞれ用があるのだ。無理をいうな」と劉備。

三人が家の前まで来て門を叩くと、召使いの少年が門を開けた。

「劉備が来たとお伝えしてくれ」と劉備。

「先生はご在宅ですが、草堂そうどうで昼寝をされています」と少年。

劉備は「それなら、お待ちしよう」と言い、関羽・張飛に門口で待つよう命じて、静かに門のなかへ入った。

と、諸葛亮が草堂の寢床で仰臥ぎようがしている姿が見えた。劉備は庭先で拱手きようしゆの礼（両手を胸の前で重ね合わせる礼）をしながら立った。しばらくしても、諸葛亮は目覚めなかった。

関羽・張飛は門口で長らく立っていたが、何の動きもないので、中へ入って見ると、なおも立ち尽くしている劉備の姿が目に入った。張飛はいきりたって、関羽に言った。

「何だ、あの野郎は。兄貴を庭先に立たせておいて、やつは高枕で寝たふりしていやがる。わしが家の裏にまわって火をつけてやる。畜生ちくしやうめ」。

関羽は再三なだめ、思いとどまらせた。

劉備は草堂の方を眺めやると、諸葛亮は寝返りして起きそうになったが、また奥の方を向いて眠ってしまった。

召使いの少年が起こそうとしたので、劉備は言った。

「そのまま、そのまま」

さらにまた一時（二時間）ほど立っていると、諸葛亮はようやく目覚めた。

諸葛亮は、寝返りをうって少年にたずねた。

「だれか、俗世からの客が来たのではないか」

「劉皇叔が長いあいだお待ちです」と少年。

諸葛亮は、「どうして早く言わないのか。着替えをせねばならない」と言うと、奥の部屋に入ったが、しばらくすると、衣服を正して挨拶に出て来た。

見れば諸葛亮、身長八尺、顔は冠の白玉のごとく、頭に綸巾（隠者がかぶる青糸で作った頭巾）を戴き、身には鶴氅（鶴の羽で作った上衣）をつけ、飄々としてまるで仙人のようである。

劉備は、ひざまずいて言った。

「私は漢王朝の末裔、涿郡の愚か者ですが、久しく先生のご高名をうかがっております。先に二度お訪ねしましたが、お目にかかれず、手紙に名前を記させていただきましたが、ご覧いただけでしょうか」

「いえいえ、私こそ南陽の田舎者で、怠け癖が身についております。たびたびおいいただき、

「いたく恥じ入っています」と諸葛亮。

挨拶がすみ、主客が座を分けて腰を下ろすと、召使いの少年がお茶を持って来た。

お茶を飲みおわると、諸葛亮は言った。

「先日、お手紙を拝読し、將軍の民を憂え国を憂うるお心は十分わかりました。ただ、私は年も若く才能も乏しいので、何のお役にも立てないと思います」

「司馬德操（司馬徽の字）どのや徐元直（徐庶の字）どのが、嘘をつかれるはずなどありません。なにとぞお見捨てにならず、お教えを賜りますように」と劉備。

「德操どのや元直どのには世にも秀れた人物ですが、私は一介の農夫にすぎません。どうして天下のことなど論ぜられましょうか。お二方はまちがって推挙されたのです。將軍はどうして美玉を棄てて頑石（石ころ）をお求めになるのですか」と諸葛亮。

「大丈夫たる者が、天下を救うべき才能を持ちながら、空しく山野に老い朽ちるべきではありません。どうか先生には、天下万民に思いをいたされて、愚かな私をお導きください」と劉備。「しからば、將軍のお志をお聞かせください」と諸葛亮は笑いながら言った。

劉備は膝を進めて言った。

「漢王朝は傾き、奸臣が天命を盗んでいる今日、私は非力をかえりみず、天下に大義を示そう

と願っております。しかし、知力が足りず、今に至るまで何もできずにいます。先生のお力で私の眼めを啓ひらいていただき、天下を災わざわいから救い出したいと願っているものでございます」

(解説)

やっと出会えた諸葛亮との対面に、劉備は全身に感激と喜びがみなぎったことでしょう。諸葛亮は、自分は一介の農夫であつて天下のことを論ずることはできませんといいますが、劉備の決意は深く諸葛亮の心に焼きつき、この後、劉備の真心にこたえようという心境になります。そして、俄然がぜん態度を一変させます。

もともと、管仲かんちゆうや楽毅がつきたらんとの抱負ほうふをもつていた諸葛亮は、ひそかに描いていた戦略「天下三分の計」を滔々とうとうと劉備に説明するのです。

諸葛亮は劉備の人物の大きさを洞察とっさつし、いっぽう劉備も、この人こそ自分の夢を託せる人物だと確信したのでしょう。時に劉備四十七歳、諸葛亮二十七歳。二人の間に横たわる生い立ちや年齢の開きを超えて、互いに確かな心の交流を感じたことでしょう。

(本文抄)

諸葛亮は言った。

「董卓の乱よりこのかた、天下の豪傑が次々に起りましたが、曹操が袁紹におよばない勢力で、よく彼に打ち勝ったのは、ただ天の時を得たというだけでなく、人の謀はかりごとがあつたからです。今、曹操はすでに百万の大軍を有し、天子を擁して諸侯に号令を發しております。とうてい対等に戦える相手ではありません。

孫権は江東こうとう（長江下流域）に拠よつて、すでに三代（父孫堅・兄孫策・孫権）におよび、地勢は堅固で民衆はよくなつております。これは味方とすべきで、敵にすべきではありません。荊州は、北は漢水・沔水べんすいの両水をひかえ、南海に通ずる便があり、東は呉会ごかい（呉郡と会稽郡）に連なり、西は巴は・蜀しゆに通じております。これぞ武力を用いるべき土地であり、凡庸ぼんような支配者では守りぬくことはできません。これは天が將軍に与えたものと申せませんが、將軍はどのように思われますか。

益州えきしゆうは要害に囲まれ、豊かな平野が千里も広がる『天府てんぷ（天の庫）』の国です。高祖こうそ（劉邦）もここより起こつて天下を統一しました。今、劉璋りゆうしやうは暗愚あんぐで、人口は多く国は豊かでありながら、民を慈いづくしむことに心をくだかないため、知能の士は明君を求めております。

將軍は漢王朝の一門であり、その信義は天下に鳴り響き、英雄たちを傘下に集め、力をつく

して賢者を求めておられます。もし荊州と益州にまたがって、その堅固な要害を固め、西と南の諸蕃族ばんぞくを手なづけ、外は孫権と手を結び、内政をととのえ、天下に変事がおこる時をまつて、一人の大將に荊州の軍勢をあたえて宛・洛えんらく（宛城・洛陽）に向かわせ、將軍ご自身は益州の軍勢を率いて秦川しんせん（渭水平原いすい）に討つてでられたならば、住民はこぞつて將軍を歓迎するでありましょう。

このようになさったならば、天下統一の大業を完成し、漢王朝を復興することができます。これが、私が將軍のために立てることのできる策です。どうか將軍にはとくとお考えください」  
言いおわると、召使いの少年に一軸いっしやくの地図を持って来させると、座敷の中央に掛け、これを指さしながら劉備に言った。

「これは西蜀せいしやく五十四州の地図です。將軍が覇業はぎょうを完成しようとなさるならば、北方は天の時を占める曹操に譲り、南方は地の利を占める孫権に譲り、人の和を占められるべきです。さらば、まず荊州を取ってしばらくの根拠地とし、そののち西蜀を取って基盤ていばんを固め、鼎足ていそく（天下三分）の形勢を作るならば、やがて中原を手中に収めることもできます」

劉備はこれを聞くや、座席を立てて言った。

「先生のお言葉で、これまでの悩みも晴れ、雲を破つて青空を見たような気がいたします。た

だ、荊州の劉表りゅうひょうも益州の劉璋りゅうしょうも漢王朝の一族ですから、その領地を奪い取ることは心苦し  
く思います」

「いいえ、私が天文を觀察てんもんしたところでは、劉表はもう長くは生きられませんし、劉璋は大業  
を立てる君主ではありません。そのうち必ず將軍の手に帰します」と諸葛亮。

劉備はこれを聞いて、深く頭をさげて、諸葛亮に要請した。

「私は名もなく仁徳も薄い身でありますが、先生には卑賤ひせんな私をお見捨てなく、山を出て力を  
お貸しいただきたく存じます」

「私は長らく農耕に親しみ、怠惰たいだになれていきますので、ご命令には従いかねます」と諸葛亮。

「先生に出馬いただけなければ、天下の民はどうなるのですか」と言いおわるや、劉備は涙に  
襟えりを濡らした。

諸葛亮はその誠意あふれるようすに、「將軍が私をお見捨てにしなければ、大馬の勞いとを厭いと  
みません」と言った。

### (解説)

こうして、諸葛亮は「天下三分の計」をもって、隱遁かりの仮の姿をはらい、その智謀をいかん

なく發揮する表舞台に登場します。すでに、草廬の中で「天下三分の計」を立てていたわけですから、冷静な目で現実社会の動向を見つめていたのです。

「天下三分の計」は一般に「草廬対」（対とは答えること）といえます。それは以下のようにまとめられます。

- ① 魏の曹操は今はまだ対等に戦えない相手。
- ② 孫権は江東を支配してすでに三代、これは味方とすべきである。
- ③ 荊州は四方に通じる要衝ようしゅうであり、天が劉備に与えた地であるからこれを支配せよ。
- ④ 益州は堅固で、沃野よくやの広がる天府の地であるから、これも支配せよ。
- ⑤ その上で南蛮なんばん西南夷せいなんい（四川省の西南の少数民族）を手なづけよ。
- ⑥ 以上の条件を満たしたうえで、内政につとめ、そして天下にいったん変事があれば、信頼する部下に荊州から洛陽を攻めさせ、劉備自身は益州から長安へ撃つてでよ。

そしてこの後、事態はこの「天下三分の計」の方向に展開していきます。諸葛亮二十七歳、知・情・意ちじょういともに、最も充実した青年期です。

諸葛亮は魏への北伐に際し、劉禪りゅうぜんに奉った「出師の表」で、

「臣は本と布衣、躬ら南陽に耕し、苟くも性命を乱世に全うせんとし、聞達を諸侯に求めず」と隱遁の生活をふりかえり、その後続いて、

「先帝、臣の卑鄙しきを以てせず、猥りに自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに当世の事を以てす。是に由りて感激し、遂に先帝に以て驅馳するを許さる」

と、出盧にいたる思いを述べています（『三国志』諸葛亮伝）。

劉備の三度にわたる訪問に、諸葛亮は劉備の真心にこたえようと決意しました。

諸葛亮は、劉備の人をして存分に力を尽くさせる度量に魅了され、劉備もまた諸葛亮の合理的な戦略眼に敬服します。二人は自分がないものを相手に見いだし、互いに、二つの半円が結ばれて一つの円になったかのような思いをしたことでしょう。